



# 園からの便り ひぐらし

2021/MAY  
こども園せいび

## アートの神がいるのなら

「くつきり、色鮮やか!」  
テレビがまだブラウン管だった頃、これがお決まりの宣伝文句だった。  
少し強くなった初夏の陽に照らされ、窓枠いっぱい映し出された今の園庭の風景こそが、まさにそれに相応しい。少し事務仕事を立て込んでいた先日、いたたまれずに、その画面の奥へと飛び込んで行った。

園庭のあちこちに散らばる、ささやかな遊びの輪を、ブラブラと覗いて回る。

年度が始まった今の時期は、ふた月ほど前の年度末に比べて、園児全体の年齢が一歳若い。

あの冬の頃、友だちと頻繁に言葉かわしながら、ダイナミックに園庭を駆け回っていた姿とは少し違って、しっとり



とした静かな雰囲気漂っている。ひとつ進級を重ね、少し広がりが増した世界に、辺りを見回しながら、ようやく一歩を踏み出したところ:そんな印象だ。

そして、少し強めの日差しを避けるため、しっかりと木陰を陣取って遊び込む姿にも関心をする。

どの遊びを覗いても、そこには、必ず遊び道具や自然物がある。つまり遊びとは、「モノ」と戯れることであることがよくわかる。そこにだんだんと、「ヒト」との関わりも絡み合ってくるのだが、集団遊びを見ても、何かに見立てる「モノ」の存在は、やはり欠かせない。

### 保育室に「玩具」

があるように、園庭に必要なものは、「ガラクタ」だ。カップ、木片、シート、ビールケース、古タイヤ...道具にも素材にもなるそういったものは、子どもにその区別などはなく、決めるのは本人。ボール

を渡したって、それはスイカにだってなってしまう。

そういったガラクタに、シャベル、ジョウロ、虫取り網といった、本来の道具も加わることで、子どもだって、特別な力を手にすることが出来る。そのおかげで、草、木、実、土、砂、水、風、虫といった自然物と、ずっと深く関わられるようになるのだ。その探求が、子どもにはたまらなく面白い。

そんな園庭を巡り、カメラを片手に、遊びのバリエーションをコレクションしてみるのが、一回りをして戻ってみると、そこにあった遊びは、もう別の形に変化をしている

ので、このキリのない作業が、何だかバカバカしく思えてくる。前の遊びを、別の子どもが引き継いでいたりするからなおさらなのだが、やりっ放しが、他児の探究心を呼び覚ましていくのも、遊びの



大切な光景なのだと思う。

そんな園庭の一角で、造形作家こいちさんと一緒に、造形遊びも繰り広げられていた。画用紙の上に、筆、クレヨン、色鉛筆、タンポ、ヘラなどを使って、「見て!」と声を上げながら、ワイワイと、たくさん色を塗り重ねている。

何と言っても、この園庭遊びの全体の風景の中に、しっかりと溶け込んでいるのがある。そう、これも他とは変わらないう「遊び」の一つなのだ。

数メートル先の砂場で型抜きされた砂の造形は、それに満足をした子どもの手によって、跡形もなく掻き消され、それは、砂山の一部へと帰っていく。一方、絵筆で描かれる絵画というものは、「作品」と称され、否

なくその足跡が残されていく。それは時に、真っ白な画用紙の前で、子どもたちに無用な緊張を強いているのかもしれない

「砂場の型抜きには、「作品」としての一瞬の輝きを! 絵画には、名もなき遊びとしての気軽さと、失敗できる喜びを!」

園長 折井誠司

●編集 幼保連携型認定こども園せいび  
●発行人 折井 誠司  
●印刷所 幼保連携型認定こども園せいび  
●発行所 社会福祉法人 誠美福祉会  
〒192-0364 東京都八王子市南大沢5-1-2  
電話 042-675-1155  
ファックス 042-677-5643  
Email: seibi@kodomonokyo.jp  
http://kodomonokyo.jp